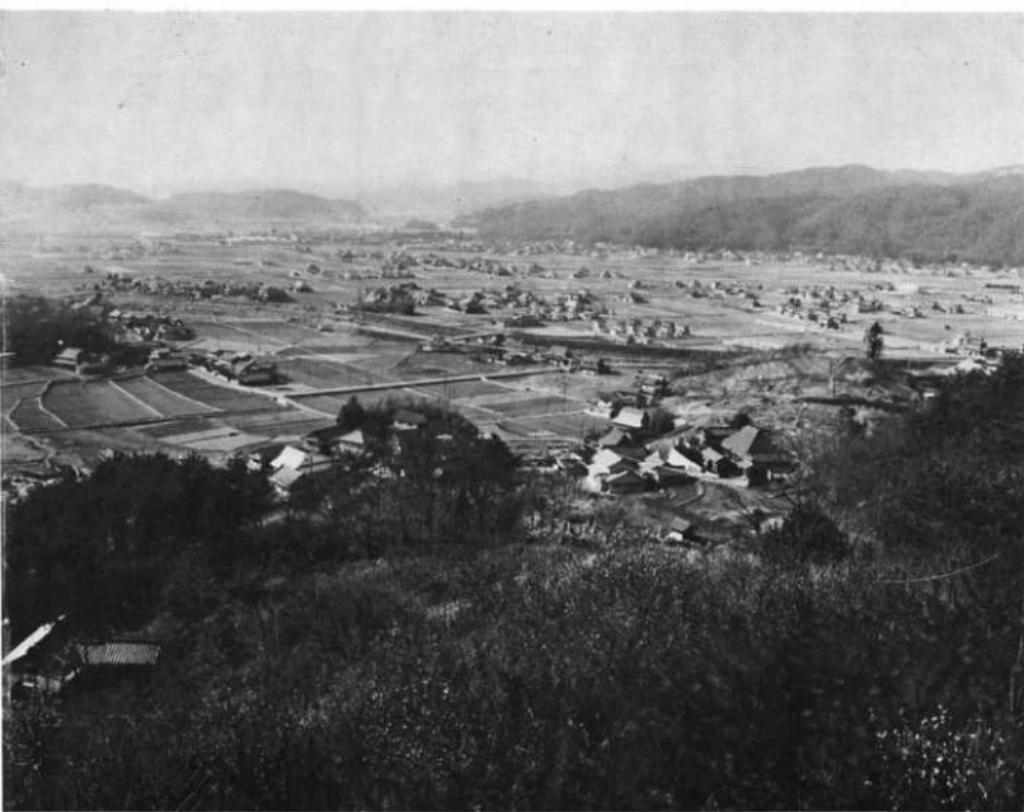


# 神辺御領遺跡第1次発掘調査概報



1976

広島県教育委員会

# 神辺御領遺跡第1次発掘調査概報

## 目 次

Iはじめに	(1)
II神辺御領遺跡の位置と環境	(2)
III調査の経過	(4)
IV検出遺構	(6)
(1) 第1区	(6)
(2) 第7区	(7)
(3) 第8区	(8)
(4) 第13区	(8)
V出土遺物	(12)
(1) 繩文土器	(12)
(2) 石器	(12)
(3) 弥生土器	(14)
(4) その他の遺物	(16)
VIまとめ	(16)

## 図版目次

図版1. a 第1区住居址検出状況	(17)	第1図 遺跡分布図	(3)
b 第1区住居址内遺物出土状態	(17)	第2図 B区出土土器実測図	(3)
図版2. a 第7区遺構検出状況	(18)	第3図 伝御領地区出土円面鏡実測図	(5)
b 第7区溝内遺物出土状態	(18)	第4図 第1区平面、断面実測図	(6)
図版3. a 第8区遺構検出状況	(19)	第5図 第7区溝断面実測図	(8)
b 第13区遺構検出状況	(19)	第6図 第7、8、13区平面、断面実測図	(9)
図版4. a 第1区住居址内出土土器	(20)	第7図 調査区配置図	(10~11)
b 出土石器	(20)	第8図 繩文土器、石器実測図	(13)
図版5. 第7区溝内出土土器	(21)	第9図 弥生土器実測図	(15)

## 例 言

1. 本概報は、昭和50年度（第1次）神辺御領遺跡発掘調査概報である。
2. 第1図の地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の25000分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭和51中度、第70号
3. 本概報は、I、II、IV(1)、V(1、2)、VIを福井万千、IV(2~4)、V(3、4)を加藤光臣、IIIを志田原重人が分担して執筆し、福井が編集した。
4. 出土遺物の整理は草戸千軒町遺跡調査研究所々員がおこない、遺物の実測、トレスは執筆者、写真撮影は福井・鹿見が担当した。

## I はじめに

広島県深安郡神辺町下御領の水田地帯となっている平野部は、以前から多量の遺物が出土し、遺跡の存在することが知られていた。1974年度に神辺町教育委員会と広島県教育委員会が神辺町鷺野地区で推定備後国跡（方八町遺跡）の発掘調査をおこなった際、備後國分寺所蔵の遺物のなかに御領地区から出土したと伝えられる円面鏡3個体分があるのを知り、古代の遺跡を予想して試掘したところ、弥生後期の遺物を多量に包蔵した遺構があることを確認した。

最近、神辺町一帯は特に宅地化が進み、多くの遺跡が破壊されており、御領地区が最もその危険にさらされている。このような状況から、広島県教育委員会は遺跡の範囲確認のための発掘調査を計画し、今年度は文化庁から100万円の補助金、県負担金100万円の計200万円の費用で試掘調査をおこなうことになり、草戸千軒町遺跡調査研究所が担当した。

発掘調査は、昭和51年1月8日から2月23日までの39日間、つぎの調査員で実施した。

松崎寿和 広島大学文学部教授 広島県文化財保護審議会委員

村上正名 福山市立女子短期大学教授 "

潮見浩 広島大学文学部助教授 "

藤田等 静岡大学人文学部助教授 "

本村豪章 東京国立博物館主任研究官

川越哲志 広島大学文学部助手

河瀬正利 "

志道和直

松下正司 広島県教育委員会草戸千軒町遺跡調査研究所長

福井万千 指導主事

鹿見啓太郎 "

篠原芳秀 "

加藤光臣 "

志田原重人 "

また地元の神辺町、神辺町教育委員会、横山宗司（国分寺住職）、菅波哲郎（県立神辺工業高校教諭）氏などの御協力を得た。

なお土地所有者の岡田先、松本智己、矢田明雄、渡辺忠三、古木勇、吉川覚、渡辺兼七、吉川トシ子、神辺農業協同組合、矢田元秋、丁田宅市の各氏からは快く土地の発掘承諾をいただきなど多大な協力を受けた。記して謝意を表したい。

調査の結果、縄文時代後期の竪穴住居址、弥生時代後期の溝状遺構、古墳時代以降の遺構などを検出し、長期にわたる遺跡の存在が確認された。

## II 神辺御領遺跡の位置と環境

神辺御領遺跡は、広島県深安郡神辺町大字下御領に存在する。ここは、古代山陽道の通過地点でもあり、備後国分寺の東南方向に位置し現在でも国道や県道が交差する交通の要衝となっている。現在遺跡の存在するとおもわれる一帯は水田あるいは畑地となっているが、広汎な地域から遺物が発見されており、遺跡の規模の大きさを窺うことが出来る。神辺町は、福山市の北部にあたり約10kmと近距離に位置しているためそのベッドタウンとして宅地化が著しい。最近では宅地造成や区画整理事業などによって周囲の丘陵や水田の大規模な開発が進んでいる。

神辺平野とその周辺の丘陵は、広島県でも有数の遺跡密集地帯で、以前から研究者の注意するところであった。

縄文時代の遺跡は、上御領丹花の土器包含地や下御領八幡原の石棒出土など数個所をあげる程度で、この時代の様相については不明な点が多くあった。今回御領遺跡で発見された縄文後期の竪円形堅穴住居址や出土した多量の遺物から神辺平野における縄文時代の研究は大きく進展するものとおもわれ、今後の調査が期待できる。

弥生時代の遺跡は、神辺平野全域にわたって増加し、県史跡指定の亀山遺跡をはじめ、御領遺跡<sup>①</sup>、高瀬遺跡、大宮遺跡、方八町遺跡、正殿寺遺跡など平地に立地するものと八丈岩遺跡など丘陵のかなり高所に存在するものがみられる。広島県では広島市の中山西塚周辺とともに最も早く稻作農耕が導入された地域といえよう。

古墳時代には平野の周辺の丘陵上に多くの古墳が築かれており、箱式石棺を有する辺木山古墳群（14基）、江草山古墳群（10基）、国分寺裏山古墳群（4基）や、横穴式石室を有する古墳の多い下御領古墳群（39基）、上御領古墳群（22基）など古墳群を形成している。

奈良時代以降の遺跡は備後国分寺跡をはじめ、小山池廃寺、内砂子廃寺、塔谷廃寺、中谷廃寺など奈良前期から平安時代にかけての寺院址が存在し、方八町遺跡では条里遺構も検出されている。また神辺城跡や要害山城跡は中世の山城として著名であり、備後の中心として早くから開けていた地域といえる。

注 ① 潤見 浩 「広島県亀山遺跡発掘調査報告」広島大学文学部紀要 第21号 1962

② 神辺郷土史研究会「弥生時代の神辺」—神辺の歴史と文化第3号— 1975

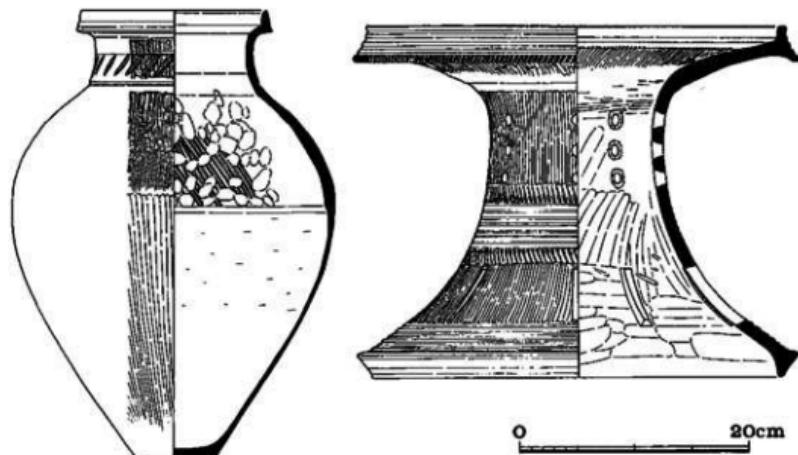
③ 広島県教育委員会「備後国分寺跡第1次発掘調査概報」1973～「備後国分寺跡第3次発掘調査概報」1975

④ 広島県教育委員会「備後工業整備特別地域内埋蔵文化財調査概報」1967



第1図 遺跡分布図

- |             |            |               |             |                |
|-------------|------------|---------------|-------------|----------------|
| 1. 御領遺跡     | 2. 高溫遺跡    | 3. 大宮遺跡       | 4. 山王山遺跡    | 5. 方八町遺跡       |
| 6. 正殿寺遺跡    | 7. 古羅敷遺跡   | 8. 国分寺跡・国分寺遺跡 | 9. 国分寺裏山古墳群 |                |
| 10. 追山古墳群   | 11. 小山池廻寺  | 12. 貝塚遺跡      | 13. 深水古墳群   | 14. 寒水寺跡・寒水寺遺跡 |
| 15. 表山遺跡    | 16. 下御領古墳群 | 17. 上御領下組古墳群  | 18. 上下遺跡    | 19. おなか遺跡      |
| 20. 中島・丹花遺跡 | 21. 淀水遺跡   | 22. 江草山古墳群    | 23. 田木山古墳群  |                |



第2図 B区出土土器実測図

### III 調査の経過

昨年度、神辺町教育委員会と広島県教育委員会が備後國府跡推定地域の発掘調査の一環として下舞領地区を試掘した際、B区で弥生後期の溝が検出され、溝内より大型器台をはじめ多量の土器が出土した（第2図）。

今回の調査は御領跡の範囲を明らかにするため、昨年度調査したB区を中心に調査区を設定することにし、遺構の検出状況にしたがって適宜拡張した。

調査をするにあたって、まず調査区設定のための基準線を設定した。条里の東西方向線の一つにあたると考えられる県道下御領新市線にはば直交し、同様に条里の南北方向線の一つと考えられる道路上に南北基準線（側溝東端部より1m東側の道路上）を設定し、この道路と県道とのT字状交点を基準点とした。そして南北基準線を軸として東西・南北に100mグリッドを組み、各グリッドの基準線に沿って調査区を設定することにした。

なお、各グリッドには便宜上西から東へ、同様に北から南へY・A・B・Cの符号を、更にグリッド内の田ごとに01、02……等の番号を同番号地区内では調査区設定順にa b……の符号を付け、調査区をAA 08 a区、YB 18 a区などと称することとした。本概報では、これを設定した順に1～13区に改めた。

1区は昨年度調査区であるB区の約42m北側の4×4mの調査区で、弥生時代後期の小溝、土塹その他、縄文時代の楕円形豊穴住居址が検出された。住居址内からは土器、打製石斧、石鎚、石核など多量の遺物が出土した。

1区の約40m北側の水田に設定した2区は南北方向に長軸をもつ4×2mの調査区で、表土下に床土、暗褐色土・黄褐色土の平行堆積が認められ、遺構は全く検出されなかつたが、暗褐色土層内より縄文土器片が若干出土したことにより、縄文時代の包含層とも考えられた。

3区はB区の約45m南側の水田に位置する4×2mの南北方向の調査区で、表土下はやや乱れた層序をなし北側は灰色砂質土が落込み、南側では灰黄色粘質土を埋土とする溝状遺構が検出された。この溝は、最上層より掘り込まれていることから、地下げによる最近の擾乱溝であると考えられた。なお、この調査区を設定した水田は、北側のB、8区に比べ一段低く窪んでおり、瓦土取りによる地下げが行なわれたものと考えられる。そのため遺構は全く認められなかつた。しかし表土層及び擾乱溝の埋土中より、多くの須恵器、土師器片と共に縄釉陶器。瓦が出土しており、奈良時代以降の遺構が存在していた可能性があり、後世に擾乱・破壊を受けたものと考えられる。

B区の約100m東側の水田に設定した4区は長軸東西方向の2×4mの調査区で、表土下は暗灰褐色土・黄灰褐色土の平行堆積をなし、表土層より土器片若干が出土したが遺構は全く検出されなかつた。

5区は4区の約16m東側に位置し、長軸東西方向の2×4mの調査区で、4区とはば同様の堆積層序をなし、遺構も全く存在しなかつた。

B区の約115m西側のブドウ畑に設定した6区は、長軸南北方向の2×4mの調査区で、表土下

は土器片を含む褐色土・褐色砂層等がかなり乱れた堆積層序をなしており、下層には礫層が認められた。これはかつて河床であったことを示すものであり、この地域が後世の川の氾濫による搅乱を受けているものと考えられる。

6区の約35m東側の水田に位置する20×

7mの十字形の7区では、表土層より弥生

土器・土師器・須恵器片の他打製石錐1が出土し、表土下の黄褐色土層を掘り込んだ弥生後期の溝、土塁、古墳時代以降の大形ピットなどが検出された。

B区の約5m西側の8区は4×2mの長軸南北方向の調査区で、上下二層にわたって遺構面が確認され、上層からは弥生及び奈良時代以降と考えられるピットが、また下層からは縄文時代のピットが検出された。

3区の約15m南側の水田に設定した9区は4×2mの長軸南北方向の調査区で、表土下の茶褐色土層で浅い小ピット1が検出されたが、遺構の保存状態は悪く、3区と同様後世の地下げによる搅乱を受けているものと思われる。

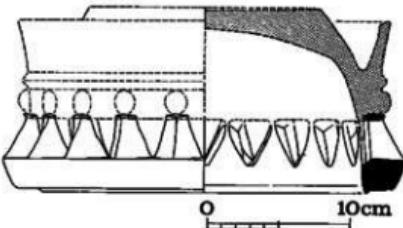
2区の約165m東側の隔離病舎跡の畠地に設定した10区は、長軸南北方向の10×2mの調査区で、表土層としては埋め土である褐色砂層があり、表土下の暗褐色土層で径5cm前後の小ピット2が検出されたが明確な遺構は確認できなかった。

現国分寺跡の円面観が出土したと伝えられる地域付近の旧井笠鉄道敷の南側に設定した長軸南北方向の26×2mの11区と長軸東西方向の2×14mの12区は共に上層は鉄道敷工事によって搅乱されており凹凸が著しい。なお、表土下は、暗褐色土・黄褐色土の平行堆積をなし、遺構は全く検出されなかった。なお表土下約1mの暗褐色土層に縄文土器片若干を包含するが、この地域が地理的に旧高麗川に近いことより、流れ込みによる再堆積層の可能性もあると考えられた。

その他、表土層より、土師器・須恵器片と共に縄文時代の磨製石斧1が出土している。

旧鉄道敷の北側の水田に設定した長軸東西方向の13区では、大溝のコーナー部分が検出され、溝内より弥生後期土器が出土した。

今回の調査によって1、7、8、13区で遺構が検出され、しかも縄文時代～歴史時代の遺構が確認されたことにより、この地域にかなり長期にわたる遺跡が存在することが判明した。また3、9、11、12区のように後世の搅乱破壊を受けている地域があるものの、遺物の散布状況より、遺跡が広範囲に分布するものと想定された。



第3図 伝御領地区出土円面観実測図

① 調査研究ニュース「草戸千軒町遺跡」No.17(1974)・19(1975)

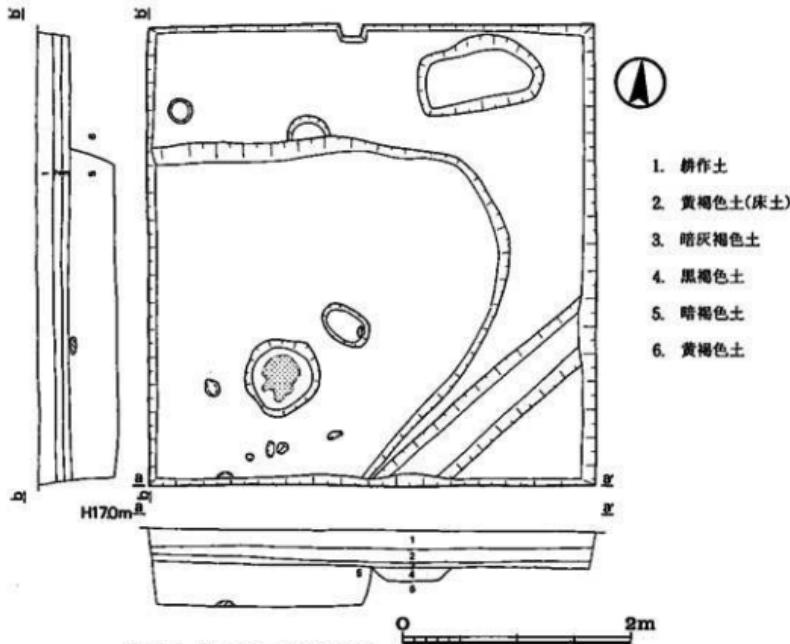
## IV 検出遺構

### (1) 第1区 (第4図)

1区は昨年度試掘調査したB区の42m北側の水田中に設けた。最初東西2m、南北4mの調査区を設定し、最下層である黄褐色土層までの掘り下げをおこなった。調査区の土層堆積は、上から耕作土の黒色土層、水田床土の黄褐色粘質土層、暗灰褐色土層、地盤の黄褐色土層となっている。

弥生時代の溝状遺構および土城 — 調査区の東南隅に北東～南西方向にのびる幅47cm、深さ12cmの浅い溝状遺構が一条検出された。中からは弥生後期の土器片若干が出土している。また調査区北部には長径1.1m、短径68cm、深さ7cmの楕円形の土城があり、弥生後期の土器片を出土している。溝状遺構とほぼ同時期のものとおもわれるが、内容についてはあきらかにできなかった。

縄文時代の住居址 — 最下層である黄褐色土層を清掃中に、不明瞭であったが、調査区の西半にかなり大きな掘り込みがみとめられた。このため住居址の可能性があると予測して西側に東西2m、南北4mの拡張をおこない調査した。その結果、この掘り込みは予想以上に大きく、調査区外にまで延びており全貌はあきらかにできなかったが、竪穴住居址であることが確認できた。住居址は、北東部分の調査であったため全体の形は不明であるが、平面形が北東～南西に長軸を



第4図 第1区平面、断面実測図

もつ梢円形を呈するものと推測される。住居址は、最下層の黄褐色土層を掘り込んで造られたもので、床面までの深さは約44cmをはかる。壁の傾斜はかなり急で、床面はほぼ水平となっている。床面には南西寄りに炉址が存在する。直径64cmの円形の赤色焼土面の周辺には灰がかなりみとめられる。住居址内においては、柱穴は検出することができなかった。

炉址の東北部には長径44cm、短径32cm、深さ6cmの浅い掘り込みがあるが、柱穴か否かは不明である。住居址の北側には直径20cmと36cmの二個の円形ピットがあり、住居址とはほぼ同時期のものとおもわれるが、住居址周辺にめぐっていないのでこれも住居址に伴う柱穴と考えるには疑問が残る。住居址内は暗褐色土で埋っているが、上半から床面直上まで多量の縄文土器、石器、石片、焼骨、木炭が大小の円礫に混って出土している。縄文土器は、後期後半の馬鹿式土器のみが多量に出土しており、住居址の時期を決定づけることができた。石器には粘板岩製の打製石斧8、姫島産黒耀石製の刃器1、安山岩製の石鎚8、安山岩製の石錐1がある。また粘板岩石片4、安山岩石片250、安山岩石核1、姫島産黒耀石核1があり、多数の円礫の出土とあわせ考えるとこの住居址内で石器を製作していたことが推測できる。

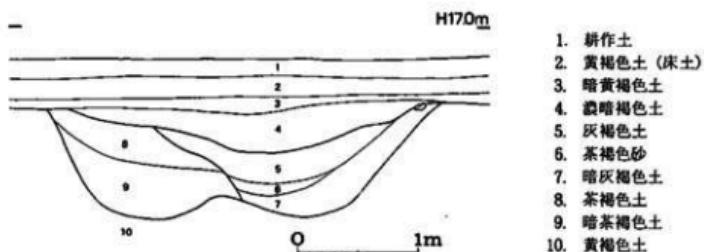
縄文時代の竪穴住居址は、西日本では発見例がほとんど無いため平面形や構造は明確にされていない。神辺御領遺跡の梢円形の竪穴住居址は、この地域における縄文時代後期の住居址の一例として貴重な遺構であるといえよう。

## (2) 第7区（第6図）

6区の東側水田に設定した十字形の調査区であり、表土下約30cmの黄褐色土面で溝1、落込1、土塙2、ピット群等が検出され遺構の保存状態は比較的良好であった。溝は調査区東端で検出された南北方向のもので、幅約3.4m・深さ1.0mのかなり大きな規模のものである。断面はU字形を呈し、堆積土層は大きく三期に分けることが可能である。

つまり、この溝は少なくとも二回にわたって大きく掘り下げられたことが考えられ、当初掘削された溝がほぼ埋まりかけた段階で新たに掘りかえされた状態を示している（第5図）。

このことは溝底中央部が凸状に高く、その凸部が流路に沿って南北に続く様相を呈すことからも窺える。なお、溝としての機能が失われる段階は最上層の濃暗褐色土層の時期であり、多くの土器を包含し、しかもこれらは放棄された出土状態を示す。出土土器は弥生後期後半のものが主体を占める。調査区西端で検出された落込状遺構は、弥生後期土器を出土するが、不定形プランをなし、深さも約25cmと浅く、内容を明らかにし得なかった。土塙は調査区中央付近及び最南端の二箇所で検出され、梢円形あるいは不整隅丸長方形形状プランを呈す。共に深さ約65cmで塙底には焼土が1~2cmの厚さで堆積しており、塙内より弥生後期後半の土器片を出土した。ほぼ同時期同性格の遺構と考えられる。ピット群は弥生土器片を出土するものと須恵器片を出土するものが混在しているが、注意されるのは調査区南壁に沿って検出された大形ピット3であり、その並び方及びピット1から6世紀代と考えられる須恵器高杯片が出土したことより、古墳時代以降の建物跡としての可能性もあると考えられる。



### (3) 第8区 (第6図)

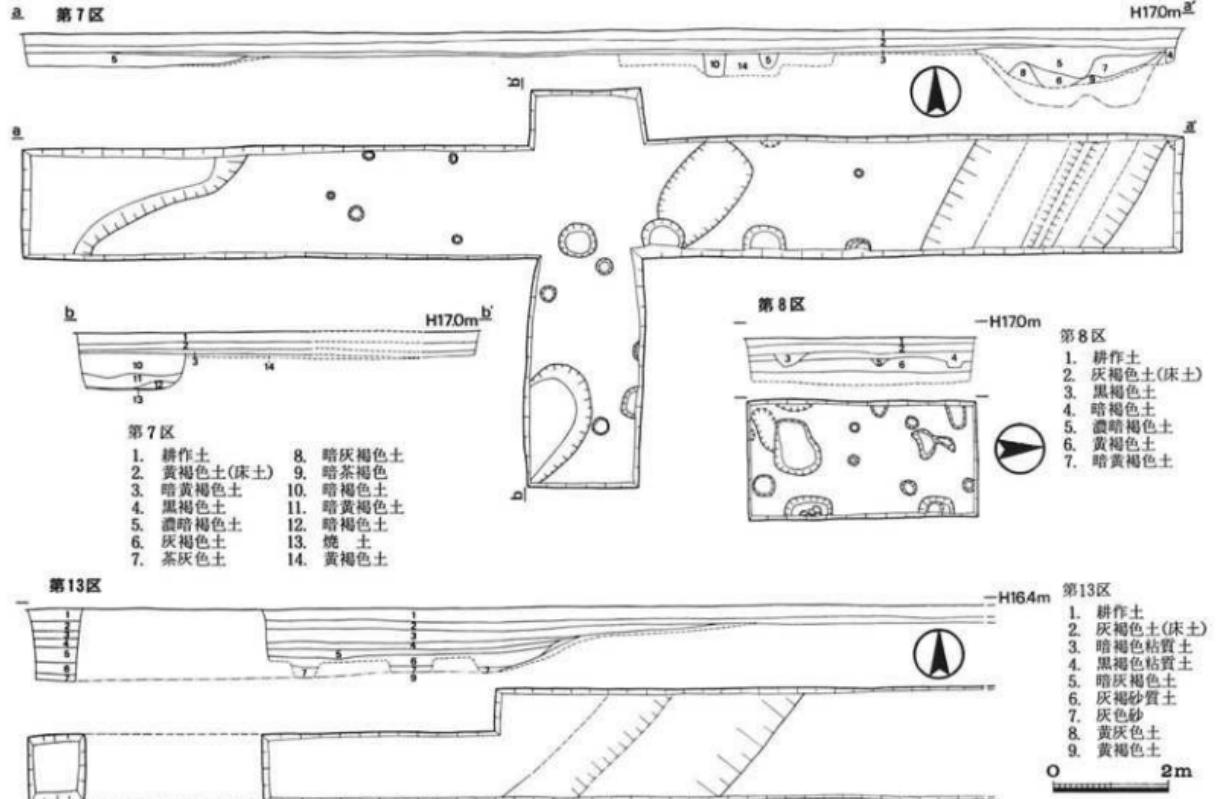
昨年度調査で弥生後期土器を多量に出土した溝の検出されたB区の約5m西側の水田に設定した調査区である。この区は造構面を上下二層に分けることが可能であり、地表下約25cmの暗褐色土面で黒褐色土を覆土とする弥生時代及びそれ以降の時期と考えられるピットが混在して検出され、更に下層では暗褐色土を覆土とするピットが検出され、いずれも縄文土器片を出土することより、1区と同様縄文時代の造構が残存することが確認された。なお、上層造構で注意されるのは調査区東壁で検出された大形ピット2で、北側ピットは奈良時代以降と考えられる須恵器片を出土し、南側ピットからも須恵器・土師器片を出土した。また南側ピットでは底に径10cm前後の河原石が敷かれたような状態でかたまって検出され、建物跡の根石的な性格をもつ可能性もあると考えられた。

### (4) 第13区 (第6図)

旧井笠鉄道敷の北側付近、9区から約36m南の水田に設定した調査区であり、地表下約35cmの黄褐色土面で溝1を検出した。深さ約0.9mの大規模なもので、溝内堆積土は整然とした水平堆積の状態を示す。

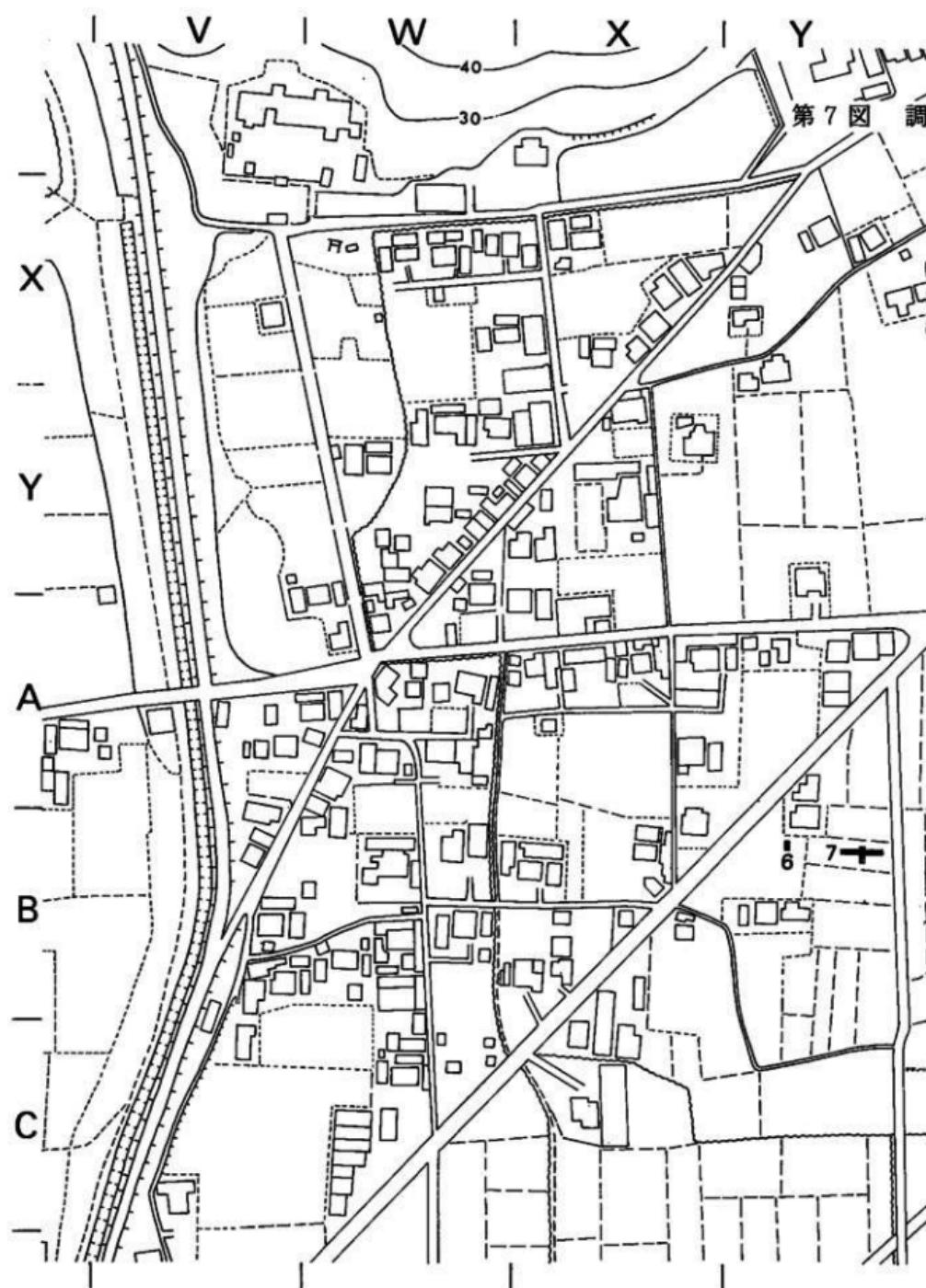
調査区を東西方向に長く設定したが、溝の東壁から約12m西側でも西壁が確認されず水平堆積土層が西側へ連続することより、溝の流路変換点にあたることが想定された。つまり、北東方向からの溝がこの地域で大きくカーブを描いて北西方向へ曲るコーナー部分を検出したものと考えられる。溝内堆積土は大きく三層に分けられると考えられ、溝掘削当初はある程度水が流れていた可能性があり、下層に砂質土が厚く堆積している。溝内出土遺物は全て弥生後期のものであるが、細片が多く堆積土層の時期差を明確に把握するまでには至らなかった。しかし、出土土器の多くは7区の溝の最上層出土土器とはほぼ同様の特徴を有し、しかも溝内堆積土層と7区溝の新たに掘り直された溝の堆積土層とに類似的な様相が認められることより、ほぼ同時期同性格の溝と考えることもできる。

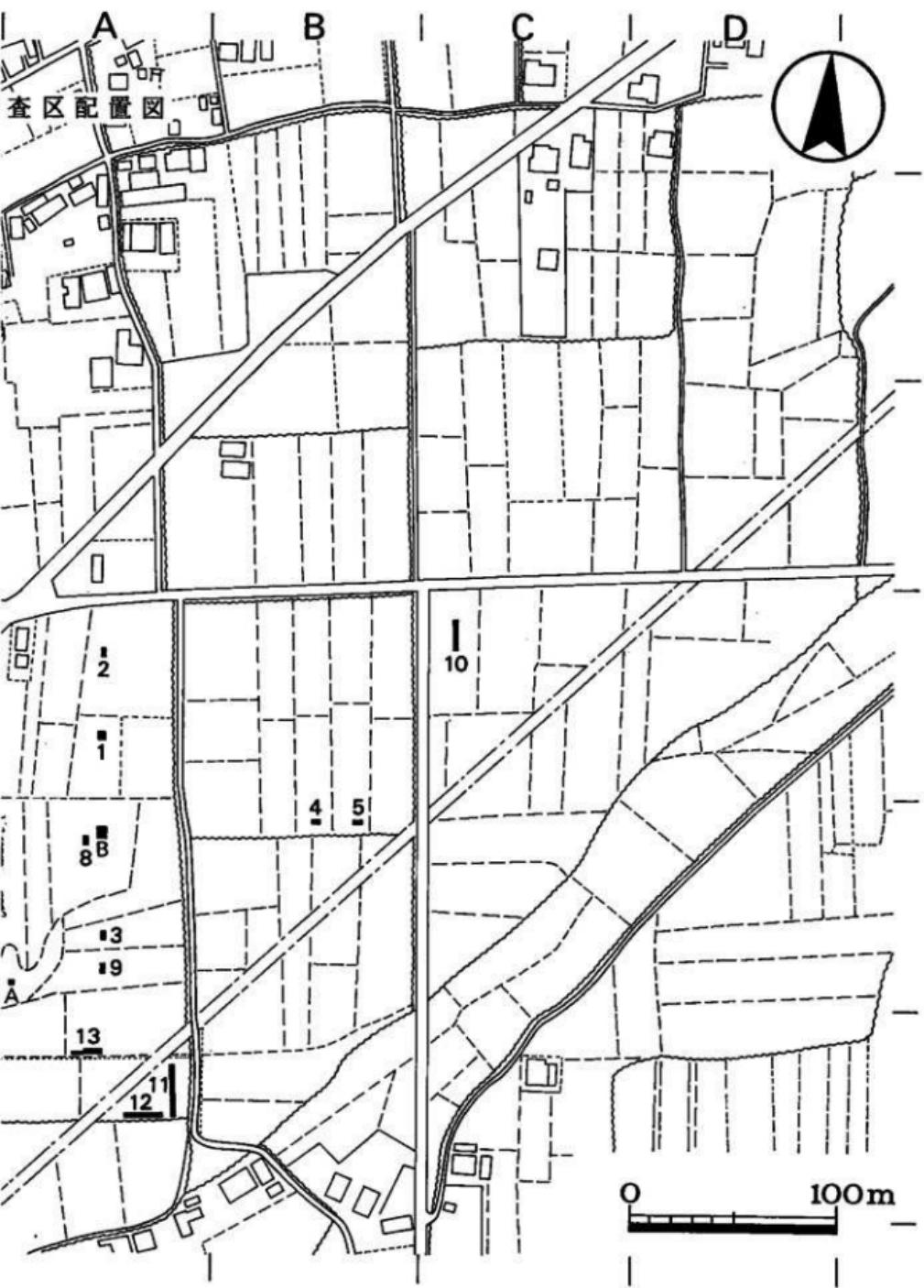
なお、13区の水田は北側の3、9区の水田のように瓦土取りによる地下げが行なわれていないことより若干地形的に高く、造構の保存状態は比較的良好であるものと想定された。



第6図 第7、8、13区平面断面実測図

第7図 調





## V 出 土 遺 物

### (1) 繩文土器 (第8図上)

縄文土器は、1区、2区、8区、11区、12区から出土した。特に1区の堅穴住居址内からは多量の石器類とともに後期後半の馬取式土器(福山市柳津町馬取遺跡を標式とする)がまとまって出土している。この種の土器は縄文が全くみられないもので、口縁部もしくは肩部に凹線、押圧、刻み目のめぐらされる比較的単純な文様のものが多い。器形には黒色半精製の鉢形土器(1、11)と、暗褐色の粗製鉢形土器(4、6、13)、壺形土器(2、5、8、10)に大別できる。

半精製鉢形土器(1)は、口縁部が外反し口縁端を上方に拡張して一本の沈線をめぐらしている。下半は肩部で屈曲して胴部が半球形となるもので、口縁部に2、肩部に1個の押圧がみられる。沈線間に赤色顔料が残っている。口縁部に二条の凹線がめぐる短い口縁部をもつもの(11)は1の器形にはほ近いものと思われる。

やや内傾した口縁部をもつ粗製の浅鉢形土器(4、6)の口縁部には幅広の凹線がめぐらしている。鉢形土器には凹線間に平行刻み目が施されたもの(12)、口縁部内側に浅い沈線をめぐらし口縁部との間に細かな平行刻み目が付いたもの(13)、波状口縁をなし波頭部に文様の中心をおき沈線間に上向きの扇形をなす圧痕が2個ついたもの(7)、円形刺突と沈線のつけられたもの(3)がある。

壺形土器は口縁部及び肩部に凹線をめぐらすもの(2)、口縁部下で屈折するもの(5)、器面に条痕がつけられ肩部に凹線のめぐるもの(10)、器表に条痕のみがみられるものなどがある。底部はいずれも凹底となっている(14)。

注口土器は注口部(15、16)2個があり、15の基部には沈線がめぐらっている。

### (2) 石 器 (第8図下)

石器は、打製石斧、磨製石斧、刃器、石礫、石錐、石錘、磨製石庖丁などが出土している。

打製石斧は9点のうち8点が縄文時代の住居址内から馬取式土器に伴って出土したもので、その形態は楕円形や長方形に近いものが多い。いずれも両面・縁辺に荒い打製作が加えられて形がととのえられている。基部の欠損したものや、刃部が磨滅して丸味をもつ使用痕のいちじるしいものがあり使用のはげしさを示している。比較的扁平なものが多いが刃部断面はむしろ鈍い。石材はいずれも粘板岩とおもわれるもので黒色を呈するものが多い(1)。

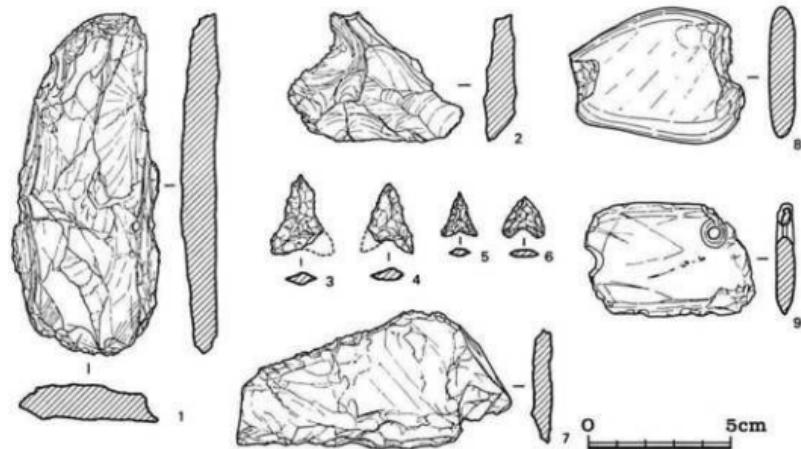
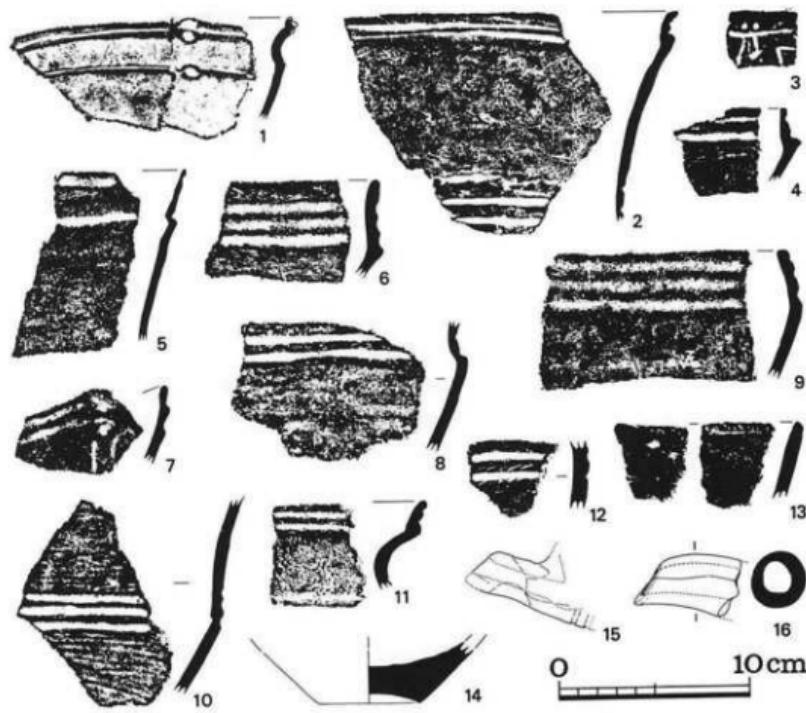
磨製石斧は、11区から縄文時代のいわゆる定角式に属するものの基部破片が1点出土している。

刃器は3点のうち住居址内から出土したものは、長辺に刃部をつくり一方につまみの付く定形化されたもの(2)で、大分県姫島産の乳灰色を呈す黒耀石を用いている。長辺の両縁に比較的こまかに打調のあるもの(7)は安山岩質の石材を使用している。

石礫は全て安山岩製のもので、二等辺三角形もしくは正三角形に近い形態をとり、基部の剝り込みが深いものと浅いものがある(3~6)。

石錐は扁平な楕円形の礫を使用し、長軸の両端に打ち欠ぎのみられるもの(8)が1区から出土している。

磨製石庖丁はB区東方で表面採集したもので、両端を欠いているが二個の円孔を有している(9)。



第8圖 繩文土器、石器實測圖

### (3) 弥生土器 (第9図)

7区、13区の溝内出土土器を掲げる。(7区溝-1~18、20、21、13区溝-19)

彫形土器(1~10)一形態的特徴より大きく三分類できる。A(1)一頸部を「く」の字状に強く外反させ、口縁部は内傾して上下に拡張する。B(2~8)一頸部を比較的緩やかに外反させ口縁部は直立気味に上方へ拡張する。なお、Aは口縁端面に明瞭な凹線が認められるが、Bは退化した凹線の残存するもの(2、4)と横ナデ調整のみによるもの(3、5~8)とがある。また外面肩部はナデ及びハケ調整、下胴部はヘラ磨きであり、内面は頸部以下がヘラ削りされている。なお、7は外面丹塗である。C(9、10)一口縁部を「く」の字状に外反させたのみで拡張面をつくらない。外面はハケ調整(9)、あるいはヘラ磨き(10)であり、内面は頸部以下がヘラ削りである。なお、10は口唇部が小さく面取りされている。

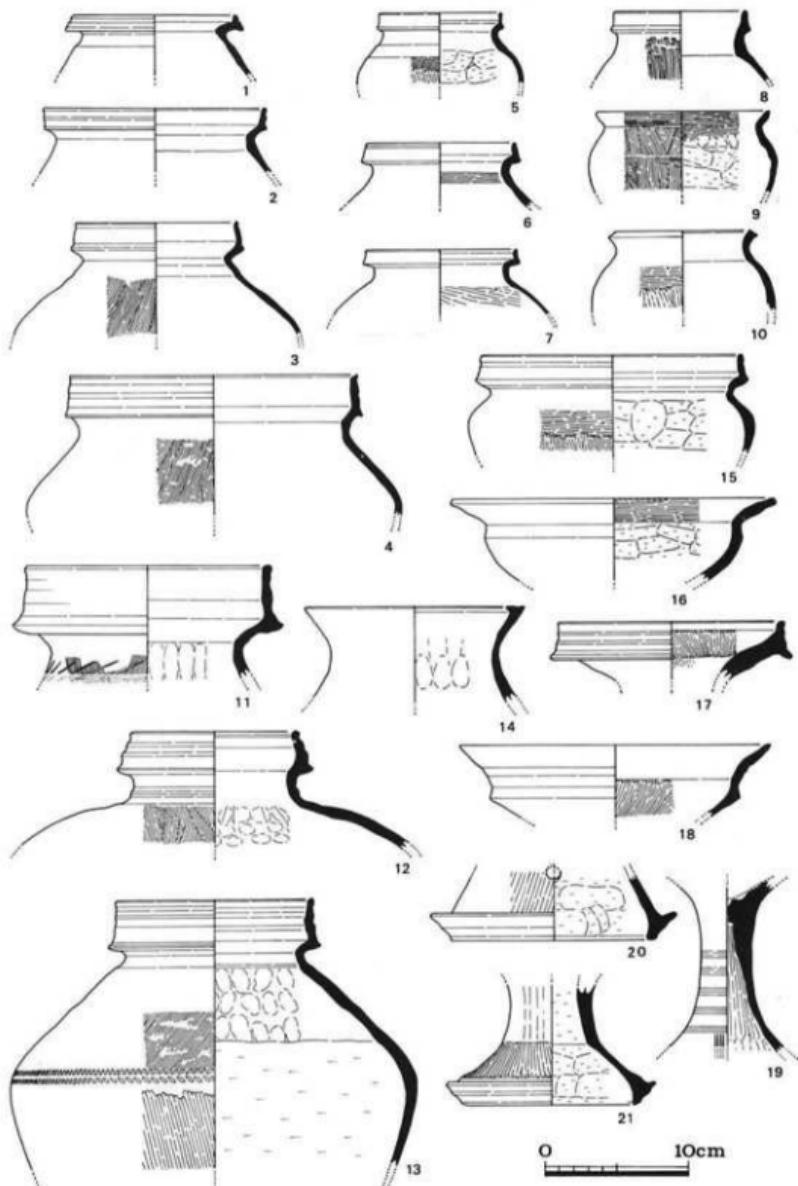
壺形土器(11~14)一四形態に分類できるが、口縁部の形態は基本的には要Bと全く同様で上方への拡張が顕著で、退化凹線またはナデ調整を施す。A(11)一器壁がややぶ厚く、長めの頸をもつもので頸部にハケ工具と同一原体による押捺文が残る。B(12)一短頸で口縁部が内傾気味のものであり、肩の張りが著しく強い。C(13)Bに比して最大径がやや下がり「く」の字状の胴張りの形態をなすもので、最大径の部分にヘラによる刺突列点文を廻らす。なお、以上の壺はほとんどが、外面肩部がハケ、下胴部がヘラ磨き調整で、内面は最大径よりやや上方以下にヘラ削りを施す。D(14)一口唇部を内方へ水平に拡張した特異な形態のもので内外面共横ナデ調整である。

鉢形土器(15、16)一要Bと同様の口縁をもつものA(15)と口縁が拡張せず外方へ強く外反したもののB(16)がある。Aは外面ヘラ磨き、Bは外面横ナデ、口縁部内面がハケ調整されているが、共に内面頸部以下がヘラ削りされている。

器台土器(17、19、20)一口縁部(17)は、上下に拡張した口縁端面に退化凹線を残し、内面がヘラ磨きされたもので、ラッパ状に開く形態を呈す。脚部は二種あり、細い柱状部からなだらかに広がる合脚部をもつもの(19)と、台脚部が鋭く立ち上がるもの(20)で、共に脚端部を拡張させ、外面ヘラ磨き、内面ヘラ削りである。

高杯形土器(18、21)一杯部(18)は口縁部が強く外反し、内面をヘラ磨きしている。(21)は長脚形態のもので柱状部及び合脚部にハケ状の細い構造平行線を施している。

以上の土器は全て後期に属するものであるが、1と2はや古式の特徴が認められ、後期初頭に位置づけられるものと考えられる。その他は形態・整形手法の特徴より、ほぼ一括して同時期に比定できるものと思われる。多くは口縁部の上方への拡張が著しく、退化凹線を残すか、横ナデによる浅い凹部を形成するものがほとんどであり、内面ヘラ削りも要は頸部以下、壺は胴部最大頸部のやや上方から下方に行なうという齊一的特徴をもつ。形態的には広島県東部で後期の様式とされている「神谷川式」に類似するものと思われる。岡山県南部、西部地域の土器と対比した場合、顯著なヘラ削り、ヘラ磨き手法に後期前半の「上東式」的な特徴を認め得るが、口縁部の形態は明らかに異り、むしろ後期後半に位置づけられている「白江II」<sup>①</sup>あるいは最近の上東遺跡の調査で把握された「才の町I」<sup>②</sup>に最も類似した要素が認められることより、これらにはほぼ併行する時期に位置づけられるものと考えられる。なお、この時期には神辺平野では遺跡の増加



第9図　弥生土器実測図

と同時に土器形態に齊一化の傾向が現われ、しかも岡山県南部、西部地域との交渉も密となるてくる様相が認められるようである。

- ① 間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」倉敷考古館研究集報 第1号、1966
- ② 梶原・藤田他「上東遺跡の調査」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 1973
- ③ B区、7区溝内及び国分寺下層より、胎土に黒雲母片を含み、形態共明らかにこの地域のもとのとは異なり、岡山県南部地域からの搬入と考えられる土器が出土している。

#### (4) その他の遺物 (第10図)

各調査区の表土層より、弥生土器片と共に須恵器、土師器類が出土しているが細片が多い。また3区の搅乱溝から須恵器片と共に縁輪陶器、瓦が出土し、8区ではピット内より須恵器片が出土しているが、これらはほとんど奈良時代以前のものと考えられる。

これら須恵器、土師器類の散布状況はこの地域に奈良時代以前の遺構が存在したことを窺わせるものであり、しかもB区からの縁輪陶器の出土や国分寺所蔵の円面鏡がこの地域から出土したと伝えられること等を併わせ考えると、官衙的性格をもつ建物跡が存在した可能性もあると想定される。

## VII まとめ

今年度の調査は、初めてのことでもあり、種々の拘束があってトレンチ調査を実施するのにとどまった。

1区で検出された楕円形の竪穴住居址は約半分の調査しかおこなえなかったが、中に炉を有する縄文後期後半のものであった。縄文時代の住居址は、西日本では非常に稀で県下では初めての発見である。住居址内から出土した8個の打製石斧は、山口県岩田遺跡で晩期初頭の土器に伴って出土した石斧に酷似しており、土掘り員として使用されたものと推定される。この石器は農耕具とも考えられるが、同時期の土器を出土した福山市馬取遺跡ではこの種のものは全くみとめられず今後の資料の増加を待ちたい。

7区、13区で検出された弥生時代後期の土器を含む溝状造構は、昨年調査したB区の溝状造構と共に通点が多いが、現在のところその規模や内容も不明である。しかしこの付近に弥生時代の集落の存在することに疑いをはさむ余地はないようと思われる。

7区、8区で検出された竪穴群から古代の建物跡が想定でき、円面鏡の出土地が付近に求められることから官衙の存在も考えられる。

以上のように試掘をおこなった御領地区の一部だけでも縄文時代から古代までの長期にわたる遺跡が確認されており、御領地区平野部全域に遺跡が広がっているものと推定されるため、今後継続して発掘調査をおこない遺跡の範囲・規模などをあきらかにしたい。

注 ① 潤見 浩 「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」

広島大学文学部紀要第18号 1960

② 松崎寿和他「松永市馬取遺跡調査報告」広島県

広島県文化財調査報告 第4集 1963



a 第 1 区住居址検出状況



b 第 1 区住居址内遺物出土状態

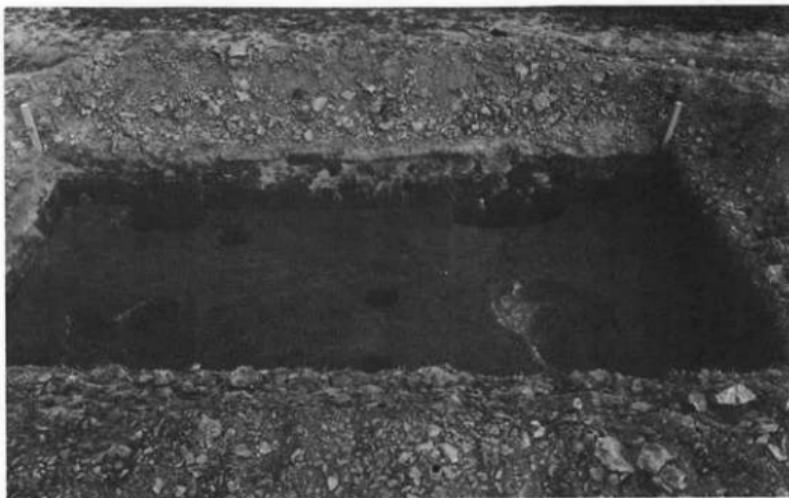
图版 2



a 第7区遺構検出状況



b 第7区溝内遺物出土状態

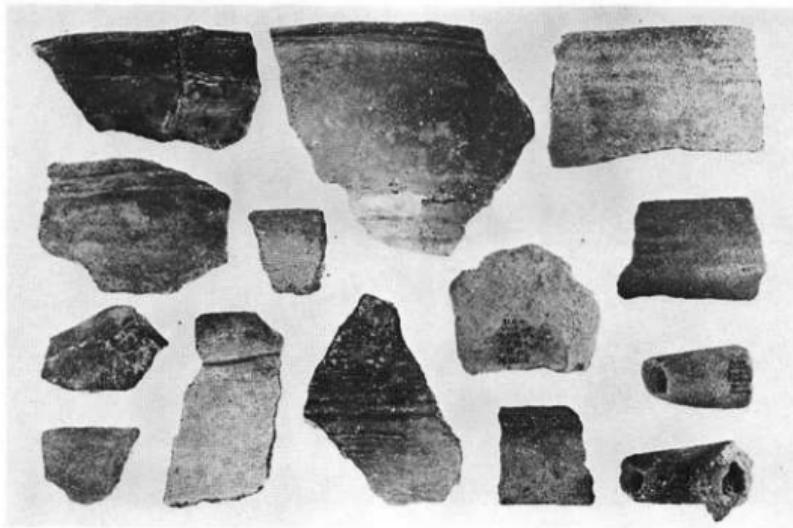


a 第8区遺構検出状況

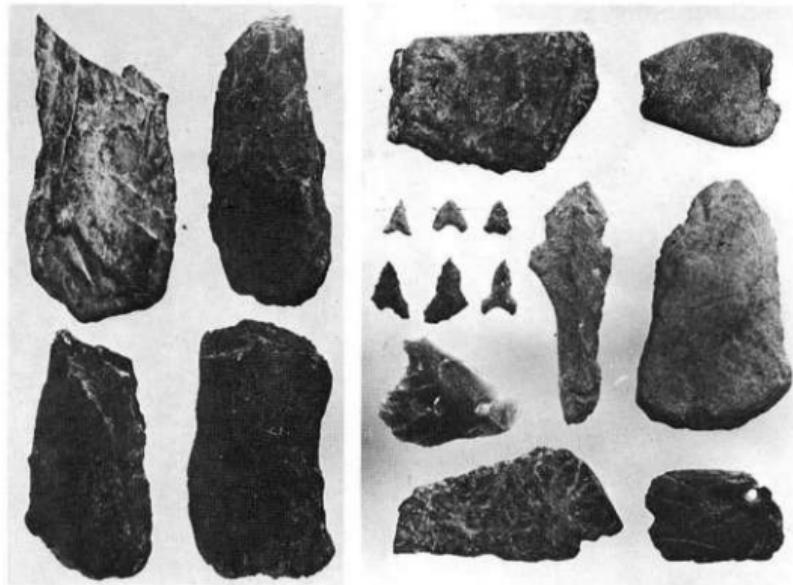


b 第13区遺構検出状況

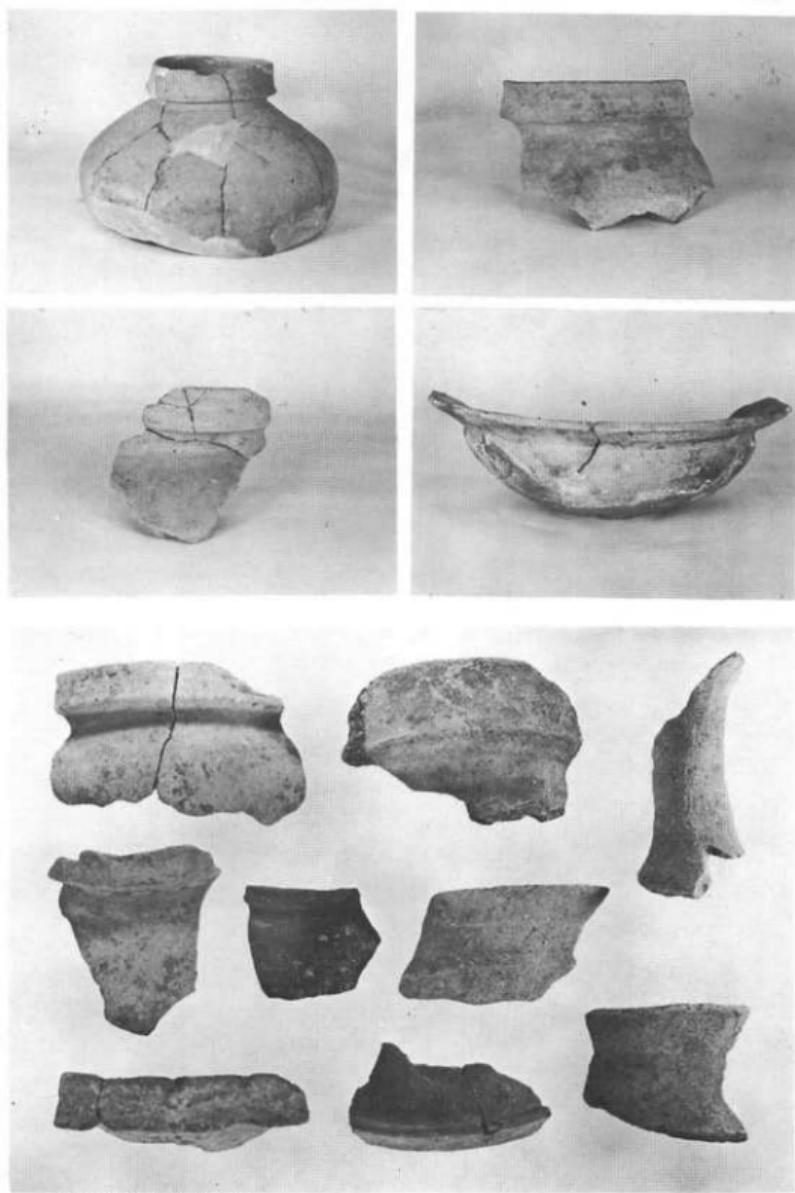
图版 4



a 第1区住居址内出土土器



b 出土石器



第 7 区溝内出土土器

1976年3月発行

神辺御領道跡第1次発掘調査概報

編集・発行 広島県教育委員会  
印刷 広鉄印刷株式会社